

長野県飯山地方の植物

高橋 勸（飯山市豊田3680）

Susumu Takahashi : Flora of Iiyama, Nagano Prefecture

まえがき

飯山地方の植物が幾分なりとも明らかになったのは、明治の末頃より下水内教育会が郡誌の編集を始めたことによる。大正2年発刊の「下水内郡誌」には「本郡の植物」と題して約1ページにわたって郡内の分布の概況が記されている。そこには斑尾山と長峰山の植物の一部が挙げられているが、これらの植物調査の素地になったものは同教育会が明治26年8月に14日間にわたって実施した矢沢米三郎氏（当時25歳、長野県師範学校教諭、後に同校校長・植物研究者）を招いての博物講習会であったと考えられる。

その後植物研究が本格的になったのは、昭和に入ってからで特に戦後は同教育会の事業の一環として多くの研究者が招かれ、また会員中より選ばれた調査委員によって飯山の植物の全容が解明されてきた。分けても横内斎氏、水島正美氏、丸山利雄氏の功績は大である。また、初めて生態学の立場から湿原の群落調査に取り組んだ松田行雄氏の貢献も大きい。

本稿はこれら先学の士の成果の上に自分なりきの調査を重ねて郷土の植物を紹介するものである。

1 飯山の位置・地形と植物分布の概況

当地方は県内では北安の小谷村に次いで日本海に近く、上越の直江津海岸から県境の関田峠までの直線距離で24kmである。したがって日本海沿岸性の気候で冬期の積雪は平地で2m前後、山地で5m前後にもなり、植物分布にも影響を及ぼしている。一方また県下の一の高緯度で尾瀬沼や小名浜と同緯度である。

地形の面では県内でもっとも標高が低く飯山市街地で315m、市最北部の西大滝で305m、栄村横倉で286mである。また高山もなく千曲川西側では斑尾山の1,381.8mを最高に、1,288.8mの鍋倉山、1,242mの黒倉山、そして1,100m前後の関田山系の山々が連なっている。東側では1,050mの小菅山、1,272.7mの万仏山が毛無山系の一角をなしている。

したがって飯山の植物相は日本海地域性、北日本性、そして西日本性のものまで混入していて複雑であるといわれている。また垂直分布では千曲川を中心とした低地帯、その周りの山麓帯、さらに低山帯（山地帯）と続き、亜高山帯を欠く。低地帯には丘陵部分にブナやクヌギがわずかに混じったコナラ林を残すが、その多くは史前帰化植物や帰化植物の外來種に占有されている。山麓帯や低地帯にはスギ、カラマツなどの植林も見られるが主にはブナやミズナラを始めとする在来種で覆われている。

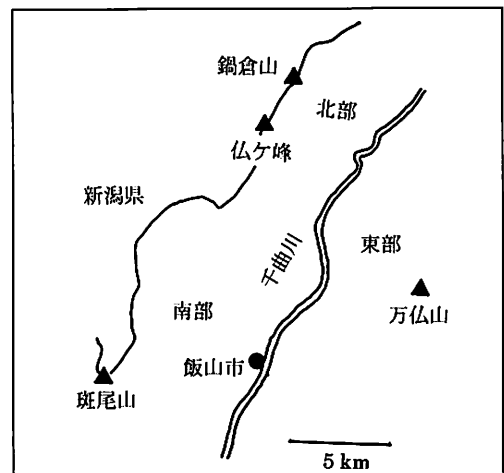


図1 飯山の植物区系

2 飯山の主な植物

飯山の大きな植物区系は南部（斑尾山から仏ヶ峰までとその平地）、北部（鍋倉山から野々海までとその平地）、東部（千曲川東の小菅山から万仏山までとその平地）に分けられる。今この全区で見られる‘飯山らしい植物’（よく目につくものと全体的に珍しいものを思いつくままに列挙すれば次のようである）。

木本ではブナ、ミズナラ、アカイタヤ、ヤマモミジ、オオバボダイジュ、シナノキ、オオバクロモジ、キタコブシ、タムシバ、マルバマンサク、ヒメアオキ、エゾユズリハ、オオカメノキ、ノリウツギ、タニウツギ、エゾアジサイ、ケナシヤブデマリ、ハイイヌツゲ、ハイイヌガヤ、エゾヤマザクラ、オクチョウジザクラ、ツシマナナカマド、シラカンバ、オクノサワフタギ、ユキグニミツバツツジ、ムラサキヤシオツツジ、ヤマネコヤナギ、コゴメヤナギ、オノエヤナギ、タチヤナギ、ミヤマカワラハンノキ、ヒメヤシヤブシ、ミヤマニワトコ、クスギ（北限は上境の千曲川べり）、アズキナシ、ケンボナシ、ツノハシバミ、ミヤマキハダ、ケアブラチャン、ケキブシ、ミネカエデ、エゾエノキ、ヤブコウジ、オオバスノキ、アオジクスノキ、アオダモ、アクシバ、ドクウツギ、クロゾル、ハリブキ、エゾツリバナ、カントウマユミ、エゾノコリンゴ、ソヨゴ、イワナシ、ミズキ、ケヤキ、ヤマツツジ、レンゲツツジ、ウラジロヨウラク、ノイバラ、リョウブ、マルバゴマギ、ヒメモチ、チャボガヤ、イヌエンジュ、チシマザサなど。

草本では、コシノカンアオイ、ウスバサイシン、トキワイカリソウ、スマレサイシン、シボリアキギリ、日本海側のキバナアキギリ、オオヒゲナガカリヤスモドキ、コシジタビラコ、ケイタドリ、オオイタドリ、ヤマソテツ、シシウド、ミヤマシシウド、キクザキイチゲ、イチリンソウ、アズマイチゲ、アズマシロガネソウ、ニリンソウ、シラネアオイ、シラネウラボ、シノブカグマ、ミズバショウ、サン

カヨウ、エゾミヤマカタバミ、ズダヤクシュ、オニシモツケ、イワオトギリ、ササユリ、エゾノカタバミ、ノッポロガンクビソウ、シュンラン、ヤマホタルブクロ、ナンブアザミ、アズマヤマアザミ、ノアザミ、ノハラアザミ、トチバニンジン、ツリガネニンジン、ツルニンジン、エゾカワラナデシコ、オオウバユリ、ヤマユリ、カタクリ、ナガハシスミレ（テングスミレ）、モウセンゴケ、ジャコウソウ、ホソバノキソチドリ、ウメバチソウ、ショウジョウバカマ、ミヤマイラクサ、ミヤマメシダ、リョウメンシダ、サカゲイノデ、シケシダ、オシダなど。

（1）飯山南部の特色ある植物



【写真1】沼ノ池のヤエガワカンバ

木本ではヤエガワカンバ、ダケカンバ、ヒトツバカエデ、ユキツバキ、カスミザクラ、ヤチダモ、カラスシキミ、ヤマコウバシ、アカモノ、ハルニレ、ダンコウバイ、ウリノキ、メギ、ウダイカンバ、オオバブナ、エゴノキ（1996年五束で初見）、ヤマコウバシ（現在、五束が北限）、ホタルカズラ、ニワトコ（千曲川原）、アズマザサ、ミヤマザサ、クザカイザサなど。

草本ではミズユキノシタ、エゾシロネ、ヒ

メミズニラ, コミヤマカタバミ, オオバキスミレ, リュウノウギク, イブキジャコウソウ, アケボノソウ, リュウキンカ, ミスミソウ, リンドウ, センブリ, オオニガナ, ゴゼンタチバナ, トキソウ, ユウスゲ, カキツバタ, ノハナショウブ, ヤマジノホトトギス, ヤマトリカブト, キツネノカミソリ, サイハイランなど。

(2) 飯山北部の特色のある植物



【写真2】 オオバツツジ

木本ではオオバツツジ, オクノフウリンウメモドキ, オオバヤシャブシ, ウチワマンネンスギ, ウダイカンバ, アカモノ, ミヤマヤナギ, オヒョウなど。草本ではカキツバタ, アヤメ, ノハナショウブ, ハイハマボックス(ヤチハコベ), トガクシショウマ, トウホクダイモンジソウ, ズダヤクシュ, コシジシモツケ, オニシオガマ, チョウジギク, ヤマトツナミソウ, ザゼンソウ, ヒメザゼンソウ, ヤナギトラノオ, センニンソウ, オニノヤガラ, イヌタヌキモ, ショウキラン, コシオガマ, コシジタビラコ, ナガボノアカワレモコウなど。

(3) 飯山東部の特色のある植物

木本ではキタゴヨウマツ, クロベ, ネジキ, タカノツメ, メグスリノキ, クマノミズキ, ハクウンボク, ノジリボダイジュ, ウリノキ,

ヤマコウバシ, オオバブナ, ツルシキミ, ナツハゼ, ホタルカズラ, チャボガヤ, ケヤマウコギ, エゴノキ, マルバゴマギなど。草本ではイワキンバイ, トウホクダイモンジソウ, クロクモソウ, ナガミノツルキケマン, エゾシロネ, ミツモトソウ, ラショウモンカズラ, サクラタデ, ミズドクサ, ミヤマウズラ, ママコナ, キツネノカミソリ, ダケゼリ, ヤマジノホトトギス, オオミゾハウズキ, ヤマトツナミソウなど。

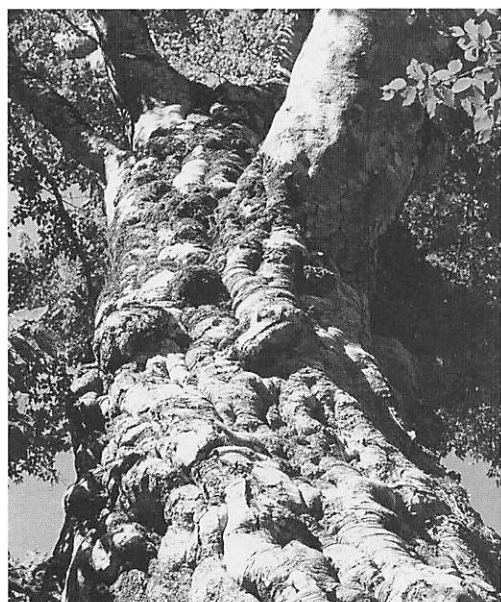


【写真3】 ヒノキ

3 特色ある数種の植物について

(1) ブナ林について

大正2年発行の下水内郡誌の一節に「ハンノキ等の《山毛櫨》《樫》密林中に点々となるを見受く此地方に於ける山毛櫨の豊富なるは実に驚くべきものあり尚林樹希少の辺には山椿或は《イヌヘバ》等歪性植物の茂生するあれども漸く低きにすれば樫の林相をなせるものなどにあらず」と記されている。「樫」は国字で「槻」のことで今のケヤキであり、「山毛櫨」はブナのことである。



【写真4】‘森太郎’

飯山の地の原植生はチシマザサ・ブナ集団であり、数千年にわたって人為的な干渉が加えられてきた現在でも標高350m前後の長峰や寺岡に切り残されたブナ林を見ることができる。

また10年程前に世間を賑わわした鍋倉山のブナ原生林を始め斑尾山、黒岩山、仏ヶ峰、野々海、小菅山一帯にも見事なブナ林が展開している。鍋倉山の「巨木の谷」の太いブナには固有名詞が付けられているがそのいわれは次のようである。

「森太郎」は一番太く筋肉隆々がっちりしているから、「こぶぶな」は幹に大きなこぶを持つから、「森姫」は少し細めで姿形が美しいから。これら3本の大木の10年間の成長ぶりは次のようである。

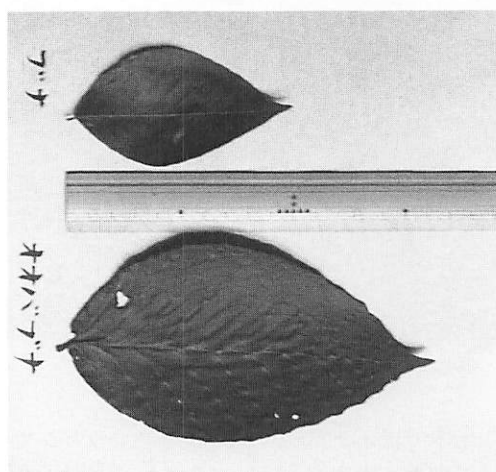
測定者は1988年は渡辺隆一氏、1997年は飯山市環境保健課で、いずれも地上130cmの胸高周囲である。左の表の数値は計算によって直径を求めたものである。‘こぶぶな’は樹上にジュウモンジシダ、サカゲイノデ、ツタウルシなどが生えていたり枝が枯れていたりして一番弱っている。

三本の巨木ブナ、森太郎、こぶぶな、森姫の胸高直径（cm）の10年間の成長

	測定年	
	1988年	1997年
森 太 郎	183	198
こぶぶな	142	143
森 姫	151	157

表1.

なお飯山の低地帯にはオオバブナなるものがあるが、次の写真のように大きさが極端に違う。



【写真5】ブナとオオバブナの葉

(2) ユキツバキについて

下水内郡誌の《山椿》はユキツバキのことである。筆者はかつて下伊那教育会の調査でヤブツバキの森を見て驚いたものである。ご指導を頂いていた大井次三郎氏は「ユキツバキとヤブツバキはもとは同じであったのではないかと思います。一方は海岸沿いの低地に、一方は雪の多い山地に適当分化したのでしょう」といわれている。現に上越の海岸沿い、特に能生の白山神社の裏山はヤブツバキで覆われている。



【写真6】ユキツバキの花

本種の分布は岩手県から鳥取県（文献によっては滋賀県）の日本海側の山地で、県的には栄村、飯山市、野沢温泉村、信濃町、小谷村などでいずれも多雪地帯である。飯山での分布は、北部では標高320mの桑名川から南進するにつれて標高が高くなり南部の斑尾山系列では800m前後となる。東部では野沢温泉村の赤滝川が千曲川東側のユキツバキ分布の南限とされていたが筆者らの1991年からの分布調査で、赤滝川より北側の湯沢川とその支流の滝ノ沢川であることがわかった。本州の分布に積雪の多少が関わっているとされるが、積雪5～6mの毛無山上部などないところを見ると年間の、特に雪の降り始めや雪解けのころの気候も大きく影響しているものと思われる。なお、本州の八重咲きのヤエノツバキが野沢温泉村、栄村、飯山市、で確認されノザワツバキの名で呼ばれている。

(3) アキギリの仲間について

飯山のこれまでのリストに、アキギリ、ミヤマアキギリ、オオアキギリ、シナノアキギリ、キバナアキギリ、コトジソウが挙がっているが今これらがすべて疑問視されている。まずミヤマアキギリはアキギリの一名なのでアキギリの有無が問題になるが、飯山でアキギリとされてきたものは花の色が紫と黄が混

じっているもので、現在アキギリの品種名としてシボリアキギリと名づけられている。また花の色が黄だけのものをキバナアキギリとしてきたが、本州は太平洋側のキバナアキギリと形態的に相違し、「日本海側のキバナアキギリ」とするのが正しいという。また、シボリアキギリは日本海側のキバナアキギリと花の色を除いて全く同じことから飯山産のものはすべて「日本海側のキバナアキギリ」として置き後の考究を待つのがよい。なお、オオアキギリはアキギリの品種名で、石川県と富山県に産し、コトジソウはキバナアキギリの葉の鋸歯の鋭いものを指すという。シナノアキギリは佐久の松原湖畔に自生するもので何かの間違いであろう。結局、飯山地方には（長野県にも）アキギリがなく、日本海側のキバナアキギリのみである。その内、花の色が紫と黄のものを特にシボリアキギリと呼んでいるというわけである。



【写真7】シボリアキギリ

(4) シシウドのなかまについて

今までのリストに、シシウド、ミヤマシシウド、ケナシミヤマシシウド、アマニュウ、エゾニュウ、ノダケなどが挙がっているが、

アマニユウ、エゾニユウ、ノダケを見ていない。

シシウドは有毛なので同定しやすいが、ミヤマシシウドやケナシミヤマシシウドは形態的な区別が難しい。果実の油管の数を調べないと確実なことはいえないが、エゾノヨロイグサも入ってきているのではないと思われる。



【写真8】ミヤマシシウド

4 飯山の絶滅種と危惧種

チシマウスバスミレ、デンジソウ、ハンゲショウ、オオアカウキクサ、サンショウモ、ムラサキミミカキグサ、セキショウモ、ヤナギスブタ、ドチカガミ、ミズオオバコ、クロモ、スズサイコ、エビネなどのラン科、ペニバナヤマシャクヤク、ヤマシャクヤク、ヒメミズニラ、ヤエガワカンバ、ノダイオウ、フクジュソウ、トガクシショウマ、ヤシヤビシヤク、イヌハギ、ノウルシ、ノカンゾウ、ハイハマボッサ、オオニガナ、コウリンカ、カキツバタ、カワジシャ、アギナシ、ナガエミクリ、ヤマジソ、ヤシヤビシヤク、タコノアシ、イヌノフグリ、ミスミソウ、オキナグサ、ヨメナ、キキョウ、コウホネ、リンドウ、センブリ、ツルボ、オミナエシ、メハジキ、マツムシソウ、ナンバンギセル、スズサイコ、カワラサイコ、ムシャリンドウ、キクモ、カ

ワラスガナ、ミソガワソウ、タヌキマメ、キツネノカミソリ、野生のフジバカマ、ハナヤスリ、キクアザミ、モリアザミなど。

今後とも実地調査を充実し、以上の植物の有無や分布の状況、植生などを明らかにして行きたい。

また、過去のリストに出ているアゼオトギリ、ハゴロモホトトギス、アマニユウ、エゾニユウ、ノダケ、カラフトミヤマシキミ、フウリンウメモドキ、コハクウンボク、エゾイタドリ、マツカゼソウ、ソクズ、ヨブスマソウなどの検討も必要である。

あ と が き

林会長さんから「飯山の植物」を本誌に紹介するようにいわれ、ごく大まかにまとめてみたものの漠然としていて鋭角さに欠けると反省している。

今まで何かとご指導頂いた丸山利雄氏をはじめ、井上健氏、今井健樹氏、松田行雄氏、渡辺隆一氏、尾曾清博氏、小沢正幸氏、また貴重な写真を提供された大平仁一氏に厚く御礼を申し上げ、さらなるご指導、ご協力をお願いして稿を終わる。

参 考 文 献

- 下水内教育会 1913
下水内郡誌 下水内教育会
水島正美・横内齋 1956 下水内郡植物誌
同上
横内齋 1962 下水内郡植物地理
同上
丸山利雄 1966 秋津村誌
(植物) 飯山市公民館秋津分館
上原幸夫 1972 木島村誌
(植物) 飯山市公民館木島分館
横内齋 1980 新編瑞穂村誌
(植物) 新編瑞穂村誌刊行会
横内齋 1971 長野県の植物 信濃教育会出版部
今井健樹 1992 信州高山高原の花
信濃毎日新聞社
高橋勲・上原脩・渡辺隆一 1991
飯山市誌自然環境編 (植物)
飯山市・飯山市誌編纂委員会